

昭和36年に開学した愛知淑徳短期大学は、62年に4つ目の学科としてコミュニケーション学科を開設しました。一方、愛知淑徳大学が昭和50年に開学、平成7年には男女共学となる中、短期大学は平成12年に学生募集を停止し、大学へと発展的に改組転換しようとしていました。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第14回は、短期大学コミュニケーション学科第10回卒業生の吉村美緒さんの登場です。

パソコンで卒論を書くため、コンピュータ演習室に入り浸っていました。

出身は名古屋ですが、親が転勤族で、中学校高校と福井、静岡で暮らしてました。高校生の頃、人の心理や対人関係、それにマスコミに興味を持ち、愛知淑徳短期大学のコミュニケーション学科ならこの両方が学べることを知って、公募制推薦で入りました。

入学して授業の内容を調べてみると、受けた科目ばかり。たくさん履修したので、朝から夜まで学校にいて、先生たちに「いつもいるね」と言われていました。特にコンピュータ演習室には入り浸っていましたね。2年生からゼミの授業が始まると、ゼミ室にもよくいました。

当時はまだパソコンは普及しておらず、大学に入って初めて触りました。データ解析の授業とか、難しく

て、今でもパソコンは苦手です(笑)。卒論をパソコンで書くために、冬休みにも大学へ来ていました。コンピュータ演習室の席を確保するために、よく並びましたね。当時の演習室にはわざわざスリッパに履き替えて入っていたんですよ。

卒業は「女子大生の流行意識」がテーマで、女子大学と共学の大学に通う女子大生との、流行に対する意識の違いについて調べました。授業は真面目にノートを取っていましたが、難しい科目が多かったですね。特に厳しかったのは心理学の高橋啓介先生。再試を受けた覚えがあります。1年の担任の宮田スザンヌ先生やゼミの森久美子先生にも、よくこうした方がいと注意されていました。コミュニケーション学科は星が丘

が、中高から短大に上がってきた子

キャンパスのてっぺん、清明館にありました。正門を入ってからかなり遠かったのですが、その時間を見込んで通っていました。食堂は下の建物で、教室から往復するのに時間がかかったので、通学の時にコンビニでお昼を買って、教室で食べるということが多かったですね。

サークルは、マスコミ志望というところもあってアナウンス部に入りました。喋りが得意な子が集まっていたので、何回か部室で発声練習をしていました。主な活動は、近隣大学で開かれるバンドの演奏会などにMCとして派遣されて行くというもの。いくつかの大学が加盟していた団体があって、そのメンバーと仲良くなったりました。

入学前、愛知淑徳は由緒正しいお嬢様学校という印象がありました

私が就職した年は超氷河期でしたが、同級生たちは求人票を見てそれほどこだわりもなく、すぐに会社を決めていきました。銀行系が多かったですね。私はマスコミ志望でしたが求人がなく、個人で応募していましたが決まらず、最後は就職課から紹介された会社に入りました。でも1年後、リストラを機にやっぱ好きなことをしたいとマスコミ系に絞って就職活動し、広告制作プロダクションに入ることができました。

短大で一人暮らしというのは珍しくて、よく友達泊まりに来ました。夕食は居酒屋のバイトのまかないですませることもありましたが、自炊もしました。学校で勉強して、帰って自炊して、今振り返るとよくやれたなと思います。



愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科
第10回卒業生（平成8年度卒業）
吉村美緒さん

昭和51年生まれ。現在31歳。卒業後、石油関連の企業に入社するが1年でリストラに。広告制作プロダクションに再就職してコピーライターとなり、以後、いくつかの広告制作プロダクションや広告代理店で腕を磨く。平成15年から3年間、東京で勤務。昨年1月より、中日新聞に折り込まれるフリーペーパー「中日ショッパー」で編集者として活躍中。



現在の大学2号館（記念会堂）の脇の通学路あたり。この急で長い坂を上って短大の清明館へ向かった。右端が吉村さん



ゼミ合宿で訪れた岐阜県小坂町（現下呂市）の飛騨林間学園「淑友館」。裏庭でバーベキューを楽しむ



卒業式に、思い出の校舎（短大本館）で友人と